日本での教員経験を経て国際協力の道へ

着実なステップで目指す教育分野の専門家

JICAのジュニア専門員は、開発援助に関する専門知識や一定の活動経験を有し、今後も国際協力に関わることを志す若手人材が、主にJICA本部でプロジェクトの計画策定や管理をおよそ１年６カ月間経験する実務研修のポストです。終了後は、長期の専門家等として海外へ派遣されることが期待されています。今回、**ジュニア専門員**として人間開発部に所属され、教育分野のJICA事業に携わられている**村田良太さん**に、ご自身のキャリアパスについて伺いました。

ジュニア専門員
村田良太さん（むらた　りょうた）

＼これまでの／ キャリアパス

大学
経済学部
（中高社会科教員免許）
日本

将来何をしたいのか、決まっていなかった学生時代。

卒業が近づき、特にやりたいことが見つからないまま大学4年生となる。就職活動と同時に、社会科教員免許を取得するために、高校において教育実習を行う機会があり、生徒との関わり合いなどを通じて「**人の役に立つ・人の成長に関わる仕事**」である教員になることに気持ちが傾く。
また、将来のことを模索しながら、様々な本を読む中で、国際協力を生業とする「**国際協力師**」としての生き方に触れる。国際協力を仕事として行うには、専門性の確立、語学力の向上、開発途上国での現場経験などが必要とされていることも知る。将来国際協力へ関わるための道筋を思い描きながら、まずは目の前のひとつひとつを全力で取り組むことが大事であると考え、日本の教育現場で教員になることを決意。

教員
公立小学校
日本

国際協力に関心があったこともあり、基礎教育分野における経験は、将来のキャリアで役に立つと思い、小学校教員になることを決意。最初の２年間は非常勤講師として、通常学級にいる特別支援が必要な子ども達の支援を行う仕事をしながら、通信制大学に通って小学校と幼稚園の教員免許を取得。

その後は正規教員として担任の教諭となり、子ども達の成長に日々触れながら、充実感をもって学校現場で働き、特に算数や体育に力を入れて取り組む。
若手教員は、研究授業をする機会が沢山あり、校内研修や学校公開授業を通して授業実践力を磨く。また、体育主任や生徒指導主任など、学校全体をまとめる仕事を通して、学校行事の企画・運営を行い、子ども達の知・徳・体を一体となって育む、日本の学校教育の在り方を学ぶ。

● 生徒とのエピソード（現在）
→ 今では成人を迎えている当時の教え子たちもおり、最近彼らと再会できた時の喜びもひとしおだった。

JICA
海外協力隊
ボリビア

小学校教員にやりがいを感じつつも、自分の中で国際協力への情熱が失われていなかったため、JICA海外協力隊への参加を決意、南米・ボリビアへ約２年間赴任。児童数約300人の小学校で、現地の教師や生徒と関わり合いながら教育活動を行う。

● 協力隊員時代のエピソード
主に算数ワークブックの開発や算数教育に関わるワークショップを、配属先の学校や教員養成校、教育省で行う。また、配属先の学校における校内研修や学校公開授業などを通して授業研究を行う。やりがいを感じつつも、現地の先生や子ども達にとって、本当に意味のある活動ができたのか、疑問を感じたまま帰国する。

教員
公立小学校
日本

帰国後は小学校教員の仕事に復帰。JICA海外協力隊経験を経て、「協力隊でやりきれなかった思い」が日に日に大きくなる。今度は国際協力のプロとして、教育分野に携わりたいと思い、大学院進学を決意。
これまで英語を使って生活したことや仕事をしたことがなかったが、国際協力では英語が第一言語であると思い、海外大学院へ進学するために必要な勉強と仕事を両立する。

大学院
（教育開発学）
イギリス

自分がどの分野で国際教育協力で携わることができるのかを見極めるためにも、まずは広く学ぶことがよいと考え、イギリスの大学院・修士課程では、教育開発学一般を学ぶ。

日本の教育現場に携わった最初の経験が、特別支援の子ども達との関わりであったことと、協力隊時代にインクルーシブ教育に対するニーズが現地で多かったこともあり、開発途上国におけるインクルーシブ教育に対する教員の意識に興味をもち、研究を進め修士論文を作成。インクルーシブ教育の観点は、どの教科や教育活動においても含まれるものであると思っていたため、特に学ぶ価値を感じる。
コロナ禍で現地でのフィールド調査が難しかったこともあり、大学院卒業後の１ヶ月間、修士論文の調査国としたザンジバルの小学校でボランティア活動を行う。

現在

「ジュニア専門員」として、 JICA本部で
プロジェクトの計画策定や管理などを経験する実務研修を行う

詳細のインタビュー内容は次ページへ

ジュニア専門員としての現在

Q. 村田さんがこれまで「教育」を軸にキャリアを歩まれてきた中で、JICAジュニア専門員のポストに応募された経緯を教えてください。

A. JICA海外協力隊や大学院進学を経て、将来自分は**教育分野の「専門家」**として国際協力に関わる働き方を目指そうと決意しました。そのために国際協力業界での実務経験を得ようと思い、国際機関や開発コンサルティング企業など様々なキャリアの選択肢を考えていました。

その中でJICAは、**日本が持つ知見や経験**を基に開発協力へ取り組む機関であると思い、「日本の教育現場で教員を経験した過去」と「JICA海外協力隊を経験した過去」を「教育分野で国際協力に取り組む専門家としての未来」に結び付けるために、JICAでの実務経験を積むことを志しました。特に、小学校教員時代と協力隊時代に携わってきた算数教育に関しては、チャンスがあれば関わりたいと思っていました。

また、「教育」と一括りに言っても、教育政策、理数科教育、ノンフォーマル教育、インクルーシブ教育、住民協働型の教育支援など様々な専門分野に分かれています。JICA本部での「実務研修」を通じて、それぞれの知見を深めることのできるジュニア専門員のポストに魅力を感じました。

Q. 現在村田さんがジュニア専門員として取り組まれている内容を教えてください。

A. 南アフリカ共和国やザンビア、ガーナなど、アフリカ地域での理数科教育やコミュニティ協働型のプロジェクトの案件形成や進捗管理を主に担当しています。これらは、JICAの事業戦略である「JICAグローバルアジェンダ」における教育分野のクラスター戦略「1. 教科書や教材を開発し、学びを改善」と「2. 地域のコミュニティと学校との協働」に関連しています。クラスター戦略を意識しつつも、その国特有のコンテクストを考慮しながら行うプロジェクトの進捗管理は、大変複雑で難しさも感じますが、やりがいを感じるものです。専門家やコンサルタント、国際協力専門員の方々と日々相談させて頂きながら行う業務から、沢山学ばせて頂いています。

また、複数のタスク活動にも参加しています。中でも算数タスクでは、UNESCOなどが策定した、初等・中等教育における各学年の生徒に期待される「読み書き」「計算」能力レベルの指標（GPF: Global Proficiency Framework）を基に、全世界で活躍するJICA海外協力隊員が赴任先で使用できるためのテストを作成・実施しています。協力隊員の方々と再び関わることができ、大変嬉しく思っており、自分が協力隊員だった当時の感覚などを思い出しながら、協力隊員の方々に役立つサポートを本部から行えればと、タスクメンバーと協働して行っています。

Q. 村田さんはこれまで日本や開発途上国の教育現場を経験されてきたとの事ですが、JICA本部でジュニア専門員として実務研修をされる中で、これまでとは違った経験や学びを得ることがありますか。

A. 教育分野のプロジェクトを行う上でも、政策レベル・現場レベルなど様々な働きかけ方があることを学んでおり、複数の国や地域で、実施内容も異なるプロジェクトの動きを俯瞰するような視点を持つことを新たに経験しています。これまでの教員や協力隊員の視点では、考えることのできなかったことですので、日々新たな学びや気づきがあります。

また、JICA本部からは直接プロジェクトの裨益者の顔が見えにくい部分もあるため、在外事務所のスタッフやプロジェクト実施を担当している専門家、開発コンサルタント等から情報収集をしたり、出張を通じて現場の様子を把握したりしながら、少しでも現場の様子を出来る限り理解したいと思っています。目の前のことにどうしても意識が向きがちですが、現場の子ども達に思いを馳せながら、プロジェクトの進捗管理に取り組んでいます。

Q. ジュニア専門員として実務経験を積まれるながで、やりがいや大変さを感じる瞬間などがあれば教えてください。

A. プロジェクト実施国のカウンターパート機関やその先にある現場を含めて、JICAという組織を通じて多くのスタッフや関係者と協力して、一国の教育事業に携わることにやりがいを感じています。特に出張の際に、直接の裨益者である学校の校長や教員、生徒へのインタビューや授業視察などを通して、支援の成果や有効性を確認できることは、やりがいとなっています。

また、JICA本部での業務では、直接業務の進捗を確認することができないことに、大変難しさを感じています。そういう意味では、現地の専門家やコンサルタント、在外事務所の担当者などと連絡を取り、情報収集すること、月報や報告書の確認を行うことの重要性を感じています。

村田さんの視点

Q. 教育を軸に国際協力のキャリアを歩まれている村田さんにとって、課題認識や、大事にされている価値観などがあれば教えてください。

A. 「**開発途上国における教育の在り方やカリキュラムに対して、どこまで二国間の国際協力として介入するべきか**」ということに対しては、非常に課題意識があります。

国際協力業界の内外から様々な意見があり、正直、自分自身まだ今現在明確な答えを持っているわけではありませんが、「**外部者であるからこそ、できることもある**」のではないかと思っています。

外部者だからこそ見えること、言えることを、相手国のことを考えて発言するのであれば、時には厳しく、議論することも必要なのかなと思います。そういう意味では、ケースバイケースで、協力の在り方は変わってくるものなのかなと思っています。

まずは、相手国に対して、「**至誠を尽くす**」というような姿勢が大事なことであると思っています。言葉でいうのは簡単ですが、これを実践することは本当に難しいことであると思います。今後のキャリアの中で、信頼される専門家になれたらと思っています。

今後見据えている キャリアの歩み

Q. ジュニア専門員は、実務研修としてJICA本部での業務を経験した後に、専門家や企画調査員などとして海外へ派遣されることを見据えたポストになっていますね。村田さんは、今後どのようなキャリアを歩んでいこうとお考えですか。

A. ジュニア専門員としての期間が終了した直後は、教育分野のJICAプロジェクト専門家として現場での実務に励みたいと思っています。これまでの教員経験やJICA海外協力隊員の経験を活かすことできると思うので、特に算数・数学教育に携わりたいです。

今後、経験を積む中で見えてくる新たにやりたい事もあるかもしれませんが、まずは**目の前のことに集中して、自分にできることを一歩一歩やっていければ**と思っています。

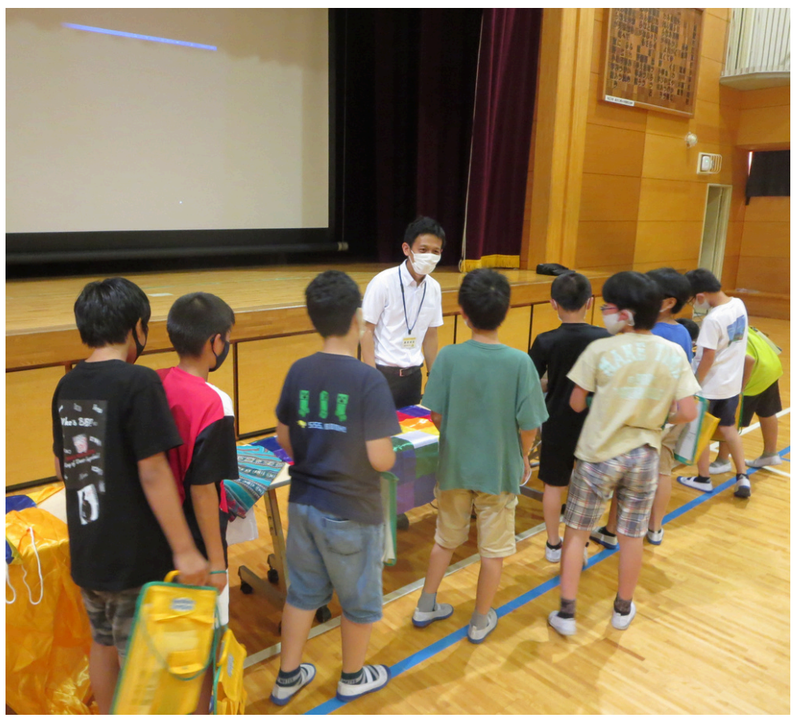
また、今後のキャリアを歩むうえで、「**志高清遠**」という言葉を、大切にしていきたいです。この言葉は、日本人残留孤児で、中国人の教師に養われて成長した青年のたどる苦難の旅路を、文化大革命下の中国を舞台に描く『大地の子』という大河小説の中に出てくる言葉です。主人公は、日本人であるということで沢山の差別に合います。その際、この言葉を育ての中国人のお父さんが、主人公に伝えました。私は、大学生の頃に、この本に大きく影響を受けました。

どんな状況にあっても、清らかな心で高い志をもち、仕事に取り組んでいく専門家になれたらと思っています。

「開発協力人材」を目指す方へ メッセージ

「やらない後悔より、やった後悔」

国際協力のキャリアを歩もうか考えた時、正直不安な気持ちを抱くこともありましたが、行動を起こさないで後から後悔するよりは、自分がやりたいと思ったことへ挑戦をして後悔した方が、同じ「後悔」でも小さくすむかなと思い、決心しました。チャレンジできる内は、前向きに進んだ方がいいのかなと思っています。



編集後記

村田さんのこれまでのキャリアパスや、今後目指されている「教育分野の専門家」としての国際協力キャリアの道筋を伺うなかで、経験するひとつひとつのステップと、そこで得る学び・気づきなどを大事にされながら決断や研鑽を重ね、一歩ずつ着実にキャリアを積み上げられてきた様子を知ることができました。
また、大学院で教育開発を学ばれた後の次のステップを模索されている際に、過去の「日本の教員経験」「JICA海外協力隊員経験」と、今後見据えている「教育分野の国際協力専門家」を結ぶ道筋として、JICAのジュニア専門員ポストを選択されたというお話が大変印象的でした。実際にジュニア専門員として、日本の経験や知見を生かした基礎教育分野のJICAプロジェクトの計画策定や進捗管理に関わったり、海外協力隊員が赴任先の教育現場などで生徒の読み書き・計算能力を測るための共通基準のテストを作成したりと、ご自身の過去の経験を生かした取り組みに励まれていることが分かりました。
改めて、インタビューを受けてくださった村田良太さんには、心から感謝を申し上げます。

インタビュー実施・記事編集（2024年3月22日）
JICA人事部開発協力人材室インターン生　**鈴木 知世**